

楽器の生命

小川未明

青空文庫

音楽おんがくというものは、いったい悲かなしい感かんじを人々ひとびとの心こころに与あたえるものですか。いい楽がっき器きになればなるほど、その細こまかな波は動どうが、いっそう鋭すく魂たましいに食いい入いるように、ますます悲かなしい感かんじをそそのるのであります。そして、奏かなでる人ひとが、名めい手しゆになればなるほど、堪たえがたい思おもいがされるのでした。

愉快ゆかいな楽がっき器きがあつたら、どんなに人々ひとびとがなぐさめられるであらうと、ある無む名めいな音おん楽がく家かは考かんえました。

その人ひとは、どうしたら、愉快ゆかいな音ねが出でるか、いろいろに苦く心しんをこらしたのです。そして、笛ふえや、琴ことのような、単たん純じゆんな楽がっき器きでは、どうすることもできないけれど、オルガンのように、複ふく雑ざ

雑つな樂器がつきになつたら、なんとかして、その目的もくてきが達たつせられは、
 しないかということかんがを考かんがえたのです。

彼かれは、日夜にちや、いい音色ねいろがで出でて、しかも、それがなんともいえな
 い愉快ゆかいな音ねであるには、どうしたら、そう造つくられるかということ
 に研けん究きゆうを積つんだのであります。彼かれは、最初さいしよ、純じゆん金きんの細ほそ
 い線せんでためしました。しかし、その音色ねいろは、あまりに澄すんで、冴さ
 えきつています。つぎに、金きんと銀ぎんと混こんじて細ほそい線せんを造つくりました。

これは、また、調ちよう子しがたか高いばかりで、愉快ゆかいな音ねといふことがで
 きませんでした。

それから、幾いくたびも失しつぱい敗ぱいして、長ながい間あいだかかつて、やつと、彼かれ
 は、鉄てつと銀ぎんとを混こん合ごうすることによつて、ついに、愉快ゆかいな音色ねいろを

出すことに成功しました。

彼は、この鉄と銀とからできた、一筋の線をオルガンの中に仕掛けました。すると、このオルガンは、だれがきいても、それは、愉快な音が出たのであります。

心を愉快にする、たとえば、いままで沈んでいたものが、その音を聞くと、陽気になるということは、たしかに、いままでの音楽とは、反対のことでした。これなら、どんな神経質な子供に聞かせても、また、気持ちのつねに滅入る病人が聞いても、さしつかえないということになりました。

けれど、ただ一つ困ることには、こうしたオルガンは、たくさん造られないことです。ただ一つの機械にはされなかつたので、

鉄と銀とで、できた一筋の線は、この音楽家の手で鍛えられるよりは、ほかに、だれも造ることができなかつたからです。それは、火の加減にあつたとばかりいうことはできません。まったく、この人の創作であつたからであります。

ある日、金持ちのお嬢さんは、外国の雑誌でこのオルガンの広告を見ました。

無名の音楽家は、このりっぱな発明によつて、すでに有名になつていました。そして、その人の手で造られた、オルガンは、ひじょうな高価のものであります。

お嬢さんは、病氣のため海岸へ保養にいつていました。そして、そこで、この広告を見たのであります。

それだけでなくてさえ気が沈んで、さびしいのを、毎日、波の音を聞き、風の並木にあたる音を聞くと、いつそう気持ちが悪入るのでした。それは、けつして、病気にとつていいことでありませんでした。

お嬢さんは、音楽が好きでしたから、こんなときに、バイオリンか、琴が弾いてみたいと思いましたが、医者は、かえつて、神経を興奮させてよくないだろうといつて、許さなかつたのです。その医者は、音楽と神経の関係をば、かなり深く心得ていたからでありますよう。

「ここに、こういう心を愉快にする、オルガンがありますよ。」と、お嬢さんは、雑誌の広告を、まだそう年寄りでない医者に

見せました。

「医者いしやは、黙だまつて、しばらくそれを見てみいましたが、驚おどろいたとい
うふうで、

「お嬢じょうさん、もしこれがほんとうなら、音楽界おんがくかいの革命かくめいです。」
といいました。

お嬢じょうさんの顔かおは、青白あおしろくて、目めは、澄すんでいました。その目め
で、じつとこちらを見て、

「そうした革命かくめいはあり得うることです。なんで私わたしたちが、それを
信しんじてはならないというはずがありません。」と、お嬢じょうさんは、
答こたえました。

「いやまったく、それにちがいありません……。」と、医者いしやは、

いうよりしかたがなかった。

彼女かのじよは、高価こうかな金かねを出だして、そのオルガンをお父とうさんから買かつてもらうことにしました。それほど、お嬢じょうさんは、このオルガンに憧あこがれました。海うみを望のぞみながら、はるか、異国いこくの空そらの下したで、この愉快ゆかいな音ねを出だす楽器がっきが、何なんびと人ひとかによつて奏かなでられたり、また、この楽器がっきが鳴なりひびく夜よが、ちようどいい月夜つきよで、街まちの中なかを歩あるいている人ひとたちが、歩あゆみをとめて、しばらく、そばの建たてもの物ものの中なかからもれる、オルガンの音色ねいろに聞ききとれている有あり様さまなどを想そうぞう像ぞうせずにはいられなかつたのであります。

あちらの国くにから、オルガンが着つきましたときに、お嬢じょうさんは、どんなに喜よろこんだでありますよう。それから、毎まいにち日ち、毎まいよ夜よ、オル

ガンを鳴らなしていました。

それは、ほんとうに、愉快ゆかいな音色ねいろでありました。ちようど、柔やわらかな土つちを破やぶつて、芽めがもえ出でるような喜びよろこを、きく人の心ひとこころに与あたえました。

浜はまの人ひとたちは、このオルガンの音ねを聞きいてから、夜よるも、うかれ心地こころちになつて、波打なみうちぎわをぶらぶら歩あるくようになりました。

「こんなに、魚さかなが跳はねることは、めつたにない。あのオルガンの音ねがするようになつてからだ。」と、漁りようし師しで、いったものもありました。

お嬢じようさんは、病びよう氣きといふことを忘わすれて、夜よもおそくまでオルガンを弾ひいていました。お父とうさんは、そのことを心しんぱい配ぱいしました。

そして、医者いしやに、どうか注意ちゆういしてくれようにと申もうされました。

医者いしやは、たとえ、なんといつても、お嬢じょうさんがいうことをきか

ないのを知しっていましたから、当惑とうわくしてしまいました。

「お嬢じょうさん、夜よる、窓まどを開あけて、そうして、いつまでも、オルガン

をお鳴ならしになるのは、いけません。」といいました。

「わたしは、あの波なみの音おとと、いま調子ちようしを合あわせているのですよ。

魚さかなが、浮うかれて跳はねると、浜はまの人ひとたちはいつています。」と、お

嬢じょうさんは、怒おこりっぽい声こえで、音おんがく樂がくのほうに、氣きをとられていい

ました。

「いえ、お嬢じょうさん、海うみの方ほうから吹ふいてくる潮風しおかぜで、オルガンが

いたむからいったのです。」と、医者いしやは、答こたえました。

彼女の彼女は、オルガンがいたむときいて、はじめてびっくりしました。

お嬢さんは、病気がよくなるらないで、とうとう死んでしまいました。そして、このオルガンは、この村の小学校へ寄付することになりました。

校長は、どんなに喜んでしよう。また、音楽の教師は、どんなにこのオルガンを弾くのうれしがったでしょう。

「みなさんは、この上等のオルガンに歩調を合わせて愉快に体操をすることもできれば、また、歌うこともできます。」

と、先生は、生徒らに向かつていいました。
 小学校は、小高いところにありました。学校の窓からは、

よく紫むらさき色の海うみが見えましました。窓まどの際きわには、オレンジの木きがあつて、夏なつは、白しろい香かりの高たかい花はなが咲さきました。そして、秋あきから冬ふゆにかけては、真まつ黄き色いろに実みが熟じゆくしたのであります。

わかおんなきようし 若い女の教師は、日ひが暮くれるころまで、独ひとり学がっこう校のこに残のこつてオルガンを鳴ならしていることがありました。また、男おとこの教きようし師しも、おそくまでこのオルガンを弾ひいていることがありました。オルガンの愉快ゆかいな音ねいろ色いろは、紫むらさき色いろの海うみの上うへまでころげてゆきました。

がつきたいそう この楽器で体操たいそうや、唱しょう歌かをならつた子供こどもらは、いつしか大おおきくなつて、娘むすめたちは、お嫁よめさんになり、男おとこは、りつぱに一人にんまえの百しやう姓じやうとなりました。けれど、その人ひとたちは、子供こどもの時じふん分にきにいた、愉快ゆかいなオルガンの音ねをいつまでも思おもい出だしたのであります。

ながとしつきあいだに、学校の先生は、変わりました。けれど長い年月の間に、学校の先生は、変わりました。けれど校長だけは、変わらずに、勤めていました。しかし、もう頭ははげで、ひげは白くなっています。

「みなさん、この学校のオルガンは、上等な品で、だれでも、この音をきいて、愉快にならないものはありません。みなさんも、毎日、このオルガンの音色のように、気持ちさをさわやかに、この音色といっしょに歩調を合わし、また、勉強をしなればなりません。」と、校長は、生徒らを集めていったのです。

唱歌の先生は、校長のいったことを、まことにほんとうであると思っていました。が、小さな生徒らは、この学校の才

ルガンを、けっして、愉快な音の出るものだとはい、信じていませんでした。

家に帰って、この話をお父さんや、お母さんにすると、「おお、学校のオルガンは、有名なものだ。」と、感歎しましたが、しかし、子供たちは、どういうものか、そのオルガンを愉快とも、なんとも思っていないませんでした。

これは、どうしたことでしょう？

もし、このオルガンを送った、年とつた音楽家が、このオルガンの音色を聞いたら、すべてがわかることです。そして、きつとそのとき、つぎのように入ったでしょう。

「小さなものの耳は、たしかだ。ほんとうに、子供たちのいうと

おり、このオルガンは、愉快な音がしない。こわれているからだ。しかし俺には、もう、それを新しく造るだけの氣力がなくなつた。このオルガンの役目は、これまでに十分果たしたはずだ……。

鉄と銀とで造られた、一筋の線は長い間海の上から吹いてくる潮風のために、いつしかさびて、切れてしまったからです。たとえこの線は切れても、オルガンは鳴つたのでした。ただ、その証拠に、もはや、このオルガンの音色が海の上をころがつても、魚が、波間に跳ねるようなことはなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「ある夜の星たち」イデア書院

1924（大正13）年11月20日発行

初出：「随筆」

1924（大正13）年4月

※表題は底本では、「楽器《がつき》の生命《せいめい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楽器の生命

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>